

発刊によせて

深 根 固 根

[しんこんこてい]

帯広の森40周年記念事業実行委員会
委員長 三日市 則 昭



帯広の森は市民の手により植樹され、市民のそれぞれの思い出と共に月日を重ね、少しずつ、大地に根を張り、森への歩みを続けてきました。

植樹が開始されてから40年が経ち、現在の森は「森林形成期」を迎えています。

樹木の本数は、満たされていますが、その樹木を大きくし、森の景観にするためには、細い木を大きい木にすることや自然林等から自生している在来種の滲みだしが求められており、間伐という間引きや実生から自生してきている在来種を育てることが必要となります。

また、森内での観察会や森林の効用を享受する利活用活動も同時に行わなければなりません。

帯広の森は市民の手により造られてきました。子供を育てると同じように、人間が手をかけた森は、義務教育が終了するまで見守らなければなりません。義務教育が必要な期間がまだ、60年間あります。

帯広の森では、色々な団体が帯広市と約束事を決めて植樹された区域内で活動しています。活動の主な内容は、間伐や林床の改善、情操教育の場、森に入りやすいようにけもの道的な園路づくり、観察会の実施など多岐にわたり行っています。

しかし、残念ながら今の活動団体だけでは広大な帯広の森を大人へと成長させることができません。今回行った40周年記念事業の「ティーチ・イン」が一つの契機となり、植樹祭、育樹祭の時の市民の力と関心がジェットストリームのように年間を通して帯広の森に向かってきてくれることを願っています。

帯広の森は、市民の皆様と仲良く一緒に歩みたいと思っています。ぜひ、手をつないでください。お待ちしております。

記念誌発刊によせて

帯広市長 米 沢 則 寿



都市の緑と河川の緑を結び、市街地をグリーンベルトで囲むという壮大な構想の実現を目指し、市民の皆さんの手で帯広の森づくりが始められてから、40年の節目を迎えました。

市民植樹祭や市民育樹祭を通じて植え、育てられた木々は大きく成長し、市街地の近くにありながら、自然豊かな森林の景観を形成するようになりました。

この間、世代を受け継ぎながら、綿々と市民の皆さんとともに歩んできたことが、現在の帯広の森として実を結んでいるものと考えております。

また、本市としましても、これまで、園路や休憩施設、拠点施設である「帯広の森・はぐくむ」など、市民が森と身近に親しむことのできるよう、整備を進めてきました。

現在では、森の木々に抱かれながら散策を楽しんだり、運動施設区でスポーツに汗を流したりなど、帯広の森は「生命を再生する場」として、大きな価値を持っております。

これほどの長い時間を掛け、愚直に木を植え続けて、広大な森をつくってきた帯広の森づくりは、日本国内においても例の見ない特徴ある都市構造を築きあげてきました。

これまで築かれてきた帯広の森を、地域の共通の財産として次世代へと継承していくとともに、この森をどう活かし、森があるまちの文化をどのように作り、深化していくかについて、これからも市民の皆さまと一緒に考え、進めていきたいと考えております。

